

競技規程細則

一般社団法人全日本かるた協会

第一章 総則

第一条（競技方法）

- 一 競技は、小倉百人一首かるたを用い、相対座する二人の競技者の間で行う。
- 二 各自、取札100枚のうちから無作為に選んだ25枚を持札とし、読手の読み上げる札（以下、出札という）を取り合うことにより、早く持札が無くなった者を勝者とする。

【補足】 ○取りによって持札を減らすのが基本だが、お手つきにより、持札が増えることもある。

○勝者は、必ず自己の持札を0枚とした上で競技を終了させること。特に1-1の場合などで送り札を行わないと、双方共自分が取ったと思ったまま競技を終了して、後から不都合が生じる場合がある。

第二条（判定）

取りやお手つきなどの判定は、原則として競技者間で決定する。

【補足】 ○競技かるたでは、競技者同士が互いの動きを良く見極めると共に、信義誠実の精神に則って冷静に主張しあい、迅速に問題解決することを旨とする。

○競技者は、本規程の解釈等が必要がある場合、審判員にこれを確認することができる。

○競技者双方の話し合いで決定できない場合、いずれかの競技者の要請により、審判員に判定を求めることができるが、審判員の下した判定には従わなくてはならない。

○仮に審判員が明らかに誤った判定を行なった場合であっても、その判定には従うこと。規程の解釈、運用に疑義ある場合は、後刻競技かるた部に照会することができるが、その場合であっても過去の判定が覆されることはない。

第二章 礼節

第三条（礼節）

競技に際しては、互いに相手を尊重するとともに、礼節を重んじなければならない。

第四条（礼）

- 一 競技者は、競技開始時、ならびに競技終了時に、対戦者、読手の順に礼をすること。

【補足】 ○審判員が個別の試合についての場合は、対戦者、審判員、読手の順に礼をすること。

○礼の際は、相手の方に身体ごと向き、顔を見て、「お願いします」「ありがとうございました」とはっきり言い、頭を下げる。

○試合の途中から審判員がつく場合は、その時点で審判員に礼をすること。

○審判員も競技者と一緒に礼をすること。

- 二 読手も、競技開始時、ならびに競技終了時に会場に一礼すること。
- 三 暗記時間中、競技中にその場を離れる際や戻る際には、対戦者に対して礼をする。ただし、払った札を取りに行く場合はこの限りではない。
【補足】 ○「失礼します」、「失礼しました」と言って礼をする。
○礼を受ける側は、軽く頭を下げる程度でよい。

第五条（着座姿勢）

競技者は、競技場内で着席している際は、正座もしくは正座に準じた姿勢でいなければならない。ただし、暗記時間中は姿勢を崩すことができる。

【補足】 ○暗記時間中に姿勢を崩すときも、立て膝や体操座り、足の投げ出しなどはいけない。

第六条（服装・装着物）

- 一 競技時の服装については、対戦者並びに観戦者に不快感を与えないものを着用しなければならない。

【補足】 ○服装については、和装が望ましいが、大会等で特段の指示がない場合は、Tシャツ、トレーナー、運動着等でもよい。しかし、ショートパンツ、胸の大きく開いた服等は好ましくない。

- 二 有効手には、着け爪、指輪等、競技中に相手に負傷させるおそれのある物を装着してはならない。

【補足】 ○有効手の爪はできる限り切りそろえておくこと。有効手は素手であることとするが、テーピング、ばんそうこうは可とする。

- 三 対戦者の前で揺れるものは、外す、もしくは固定すること。

【補足】 ○ネックレスやイヤリングのみならず、髪型についても、対戦者の前で揺れる場合は、後ろで縛るなど固定すること。

第三章 札の配置と暗記

第七条（競技線）

- 一 競技者は、その座した前方に、横87センチメートル、上中下段の間に各1センチメートルをあけて縦に札3枚が並ぶ範囲を定め、各々の陣とする。その各々の陣の外周の各辺を競技線とよぶ。

【補足】 ○競技線は畳に接した部分だけを指すのではなく、その垂直上空も含む。

○競技線に囲まれた範囲は、自己の陣（以下、「自陣」という）、相手の陣（以下、「相手陣」という）と2つに分かれて存在することになる。

○本条の87センチメートル、3センチメートル、1センチメートルという数字は1ミリメートルでも間違えば違反になるというものではないが、日頃より、その長さがどの程度のものかは確認しておくべきである。

- 二 双方の陣の上段の間隔は3センチメートルとし、左右の競技線の延長線は一致させる。

【補足】 ○畳目に合わせて札を並べる場合には、双方の上段の競技線の間は3センチメートルより多少広くはなるが、畳目3目あけてと解釈する。但し、明らかに畳目1目が1.5センチメートル以上の場合はこの限りではない。

第八条（持札）

- 一 競技者は、場に与えられた札を裏向きにして混ぜた後、裏向きのまま各25枚を選び、自己の持札とする。
- 二 いずれかの、又は双方の持札が25枚でないとき、暗記時間終了迄に限り、札の過不足の調整を行なうことができる。

【補足】 ○競技者は、双方の持札が25枚あることを互いに暗記時間中に確認しなければならない。

○札の過不足の調整は、審判員に申し出て、審判員の指示で行う。

○暗記時間終了後に持札の過不足が判明した場合には、札の枚数の調整はせず、そのままの枚数で競技を続行する。

第九条（持札の配置）

競技者は、持札全てを表向きにし、文字を自己の方に向け、重ねず、整然と各々の陣の任意の位置に並べる。ただし、上中下の各段にまたがって並べてはならない。

第十条（持札の移動）

- 一 競技者は、持札を移動させる場合、その都度対戦者に通告しなければならない。

【補足】 ○札の移動については、競技者ははっきりと通告し、それを受けた対戦者もはっきりと返事をする必要がある。

○持札の移動の通告を怠った場合、ただちに違反無効とはしない。しかし、通告を怠る事が度重なる場合、故意による場合には審判員の判断による。

○暗記時間を含め、頻繁な移動や、一度に大量の移動を行なうことは好ましくない。

- 二 出札を取った時や、札を移動させた時に、隣接した札を横に詰める場合は、この通告を省略することができる。
- 三 競技者は、下の句の読みが始まってからは、札を移動させることができない。

第十一条（暗記時間）

- 一 競技者が持札を並べた後、競技を開始する前に、15分間の暗記時間をとる。
- 二 暗記時間が残り2分となるまでは、手を動かしての暗記や素振りなど、対戦者の暗記の妨げとなる行為を行ってはならない。

【補足】 ○暗記の妨げとなるような行為には、素振りや畳を叩くことだけでなく、頻繁に手を出したり振ったりしながら暗記をすることも含まれる。

○暗記時間が残り2分となる前に素振りやウォーミングアップ等を行う場合は、相手に札をして席を離れてから、別の場所で行うこと。

第十二条（札の整理）

札を取るなどして、並べてある札が散逸した場合、原則として札を払った競技者が拾いに行かなければならない。

【補足】 ○札は払った競技者が拾いに行くが、対戦者もできるだけ協力する。その際、他の競技者の競技線内を歩くことは厳に慎まなければならない。

○散逸した札を他の競技者に渡す際には、丁寧に渡すこと。

○札の整理は座って行い、あぐら、立て膝、中腰等の姿勢は慎むこと。

○札を並べずにもめることは避け、先に札の整理をしてから話し合うこと。

第四章 構え

第十三条（構え）

一 競技者は、左右どちらか一方の手を札を取る手（以下、有効手という）と定め、上の句が読み始められるまでは、畳に接した状態で自陣の下段よりも手前に置いておかなければならず、頭は自陣の上段より対戦者側に出してはならない。

【補足】 ○本条に反する行為に対しては、対戦者からのアピールが無くとも、審判員は注意することができる。

○自陣の下段よりも手前とは、その上空も含める。また、有効手だけではなく、逆の手、両脚も手前でなければならない。

○ここで言う「頭」には頭髮も含まれる。

二 有効手は、左右どちらか一方の、手首より先のすべての指、手の平、手の甲とするが、競技中に有効手の左右を変更することはできない。

【補足】 ○競技開始後に、最初に札を取った手、もしくは最初にお手つきをした方の手を有効手とする。ただし、最初の取りやお手つきの際に、有効手は逆の手であり、今の取りやお手つきが有効手とは逆の手だったと対戦者に伝えた場合は、そのように措置する。

三 競技者は、上の句が読み始められるまでは、有効手を、左右の競技線の延長線より外に出してはならない。

四 競技者は、読みが下の句の余韻に入ってから、対戦者の妨げとなるような大きな動きをしてはならない。

【補足】 ○下の句の余韻前までには本条に定める構えの状態になっていること。

第五章 読み

第十四条（読み）

一 読手は、読札100枚の中から無作為に選んだ札を1枚ずつ読み上げるが、同じ札を読み上げることはない。

二 次に読み上げる札は、読み上げる都度その直前に読手が決める。

【補足】 ○読手は、未読の札を箱の中に置くなどの方法により、次に読まれる札が何であるかが何人にも分からないよう、十分注意しなければならない。

三 読手は、札を読み上げる際には、その前に読んだ札の下の句を読み、続けて次の札の上の句を読む。

【補足】 ○読み終わるや否や次の札を読み始めるようなことは避ける。

○競技者が札の整理や送り札を完了し、次の札を待つ準備ができたと判断できるまでは読み始めないようにしなければならない。

四 読手は、1枚目の札を読む前に、小倉百人一首には含まれない短歌を序歌として読み上げるが、上の句、下の句と続けて読んだ後、もう一度下の句を読み、続けて1枚目の札の上の句を読む。

五 読手は、原則として些細な物音等で読みを中断しないこと。ただし、競技の上で重大な支障があると判断する場合は、読みを中断させることができる。

【補足】 ○競技者は、物音等があった場合でも、読みが中断しないものと想定しておくこと。

六 読手は、やむを得ない場合を除き、途中で交代もしくはその位置を移動する事はできない。

第十五条（読みの成立）

- 一 読手が決まり字まで読み上げた時点で読みは成立し、その札での取りやお手つきが成立する。

【補足】 ○ここでいう決まり字とは、出札一枚を確定できる文字を指す。例えば、「あはじ」「あはれ」が同一陣にある場合であっても、「あは」までしか読まれなかった場合は、出札一枚を確定することはできないため、読みは不成立とする。これは競技の対戦数が1組であった場合も例外とはしない。

○読みが途中で止まったり、発声が著しく悪かったりした場合、審判長は読みの不成立を宣言できる。

- 二 一度読みが成立した札を誤ってもう一度読み上げてしまった場合でも、まだ読まれていない札の決まり字までが読み上げられていた場合は、そちらの札の読みが成立したものとする。また、このときのお手つきは全て無効とする。

【補足】 ○例えば、「あはじ」が場にあり、「あはれ」が既に読まれていた場合、再度「あはれ」と読んでも、「あは」と読まれた時点で有効とし、「あはじ」が読まれたものとする。

第十六条（読みの制止）

- 一 競技者は、原則として札の整理以外に読みを待たせることはできない。

【補足】 ○札の整理中に読みが始まることを未然に防ぐ意味からも札の送りは札の整理前にすることが望ましい。

○札の整理以外で読手に待ってもらうことが必要な場合とは、試合進行の中断が客観的に必要な場合に限る（たとえば怪我をして対応する場合など）。

- 二 読みを待たせる際は、挙手、または、言葉によりはっきりと読手に合図をしなければならない。ただし、必要以上に待たせてはならない。

【補足】 ○一方が札を整理している場合、対戦者は手を挙げて読み手に合図をすることが望ましい。但し、札の送りを完了していない競技者は自らが手を挙げること。

- 三 競技者は、下の句が読み始められてからは、読みを制止してはならない。ただし、手を上げているにもかかわらず、読手がこれに気付かずに読み始めた時は、この限りではない。

【補足】 ○下の句が読み始められてから札の誤配列、紛失、送り忘れ等に気がついても、読みを制止してはならない。

第六章 取り

第十七条（取りの成立）

- 一 出札が競技線内にあるうちに、対戦者より早く有効手で直接触った者が出札を取ったものとする。（札直接の取り）

【補足】 ○札が全く重って、且つ、出札が下になってしまった場合で、まだ出札が競技線内に残っているときは、上の札に触っても出札に直接触っていなければ取りは成立しない。

- 二 共に札直接の取りではなかった場合でも、出札を完全に有効手で競技線外に押し出したときは、その札を取ったものとする。（札押しの取り）

【補足】 ○自陣と相手陣をまたぐ札押しも有効とする。従って、相手陣上段の出札を取ろうとして誤って自陣上段の札から突き上げ、対戦者が出札に触れることなく出札が競技線外に出たような場合、自陣の札へのお手つきと札押しの取りとで、いわゆる「取り損」となる。

○札押しの際、畳のヘリや競技者の膝などに出札が引っ掛かり、競技線外に出なかった場合も、札押しの取りは成立していないものとする。

三 札押しを行った際、出札が完全に競技線外に出る前に、対戦者が札直接の取りをした場合は札直接の取りを有効とする。

四 共に同じ方向への札押しの場合は、出札により近く触れた者の取りとする。

五 異なる方向への札押しの取りの場合は、最終的に出札を競技線外に押し出した者の取りとする。

【補足】 ○異なる方向への札押しの取りとは、例えば、横からの押し払いと、下からの突き上げのような場合であり、払い始め、突き始めの手が出札に近いか遠いかは必ずしも最終的な取りの判定にはつながらない。

第十八条（同時の取り）

一 共に札直接の取りで、同時に出札に触れた場合は、出札を持札としていた者が取ったものとする。

二 共に札押しの取りで、どちらの取りか判断がつかない場合は、出札を持札としていた者が取ったものとする。

【補足】 ○前条の第四項、第五項に照らしてもどちらの取りか判断がつかないほど微妙な場合に、自陣の取りとするもの。

第十九条（紛失時の取り）

一 紛失したままになっていた持札が出札となった場合は、対戦者の取りとする。

二 紛失していた出札がどちらの陣にあったかについて、双方の主張が食い違う場合、もしくは双方の記憶が定かでない場合は審判員が判断する。

【通達】

○紛失している札が出札になったとき、お手つきは全て無効（お手つきなし）とする。

平成 29 年 6 月

（平成 29 年 7 月より適用）

第二十条（誤配置時の取り）

一 同一陣内で誤った場所に並べてしまった札が読まれた場合でも、読まれた時点の配置を有効とし、取りやお手などを判断する。

【補足】 ○競技者は、常に双方の札の配置について確認しなければならない。

二 自己の持札が間違っ相手陣に配置されてその札が読まれた場合は、取りについては紛失と同様の扱いとし、その際のお手つきは無効とする。

第二十一条（取りの無効）

以下の妨害行為を行った場合は、その都度その取りを無効とし、対戦者の取りとする。

(1) 上の句が読み始められる前に有効手を競技線の中に入れたとき。

(2) 相手の身体の一部を握るなどし、相手の取りを妨害していたとき。

(3) 有効手と反対の手（以下、「無効手」という）で、直接出札に触ったとき。

(4) その他対戦者に対する妨害と認められる行為。

【補足】 ○妨害行為を行った競技者が出札を取ったときに適用するものであり、出札を取ってないときには適用されないが、妨害行為そのものは、その程度、回数によっては、審判員による注意、警告、退場の対象となり得る。

	<p>○ (3) 無効手で出札を競技線外に出した場合も妨害とする。</p> <p>○着物や膝が出札を遮るなどして対戦者の取りが妨げられた場合、妨害行為と認定するかどうかは、競技者のアピールにより審判員が判断する。</p>
<p>【通達】 平成 29 年 6 月</p>	<p>○出札の有無にかかわらず、フライングなどの妨害行為があった場合、その行為を行った者のお手つきは有効とし、その行為を行っていない者のお手つきは無効とする。</p> <p>(平成 29 年 7 月より適用)</p>
<p>第二十二條（取りの特例）</p> <p>一 不可抗力によって出札が競技線の外に出てしまった場合は、出札を持札としていた者が取ったものとする。</p> <p>【補足】 ○不可抗力による札の移動とは、隣の競技者の飛ばした札が接触した場合などを指す。</p> <p>二 不可抗力の場合であっても、出札が本来の陣内に留まった場合は、出札に触れるか出札を札押しで出した場合に取りとする。</p>	
<p>第七章 お手つき</p>	
<p>第二十三條（お手つき）</p> <p>一 出札が無い陣の札を、その札が競技線内（空中を含む）にあるときに有効手で触れた場合、これをお手つきとする。</p> <p>【補足】 ○出札がある陣の出札以外の札に触っても、お手つきとはしない。</p> <p>○対戦者が払うなどで札が動いてきて、その札がまだ競技線外に出切っていないときに有効手に触れた場合もお手つきとする。ただし、触れた有効手が構えの段階から畳につけたままだった場合はお手つきとしない。</p> <p>二 有効手が一方の陣の札に触れたままその札が他方の陣に入り他方の陣の札と接触した場合でも、有効手が他方の陣の札に触れていなければ他方の陣はお手つきとしない。【規程変更：下記通達参照】</p> <p>【補足】 【補足削除：下記通達参照】</p>	
<p>【通達】 平成 31 年 4 月</p>	<p>○第二十三條第二項を以下のように改めるとともに、補足を削除する。</p> <p>有効手が一方の陣の札に触れたままその札が他方の陣に入り他方の陣の札と接触した場合でも、有効手が他方の陣の札に触れていなければ他方の陣はお手つきとしない。</p> <p>(令和元年 5 月より適用)</p>
<p>三 札に触る意思の有無にかかわらず、札を取る動作の一連の流れの中で札に触ってしまった場合、お手つきとする。</p> <p>【補足】 ○相手陣の札を取った手を戻そうとただけのときでも、一連の流れの中で自陣の札に触れた場合はお手つきとなる。</p> <p>○札を取る動作の最後に、畳を叩こうとして誤って札に触れた場合も一連の流れとみなし、お手つきとなる。</p> <p>四 明らかに、札の整理等で札に触れた場合は、お手つきとみなさない。</p> <p>五 有効手以外で札に触ってもお手つきとしない。</p> <p>六 読みが不成立の場合のお手つきは全て無効とする。</p>	

第二十四条（共お手つき）

- 一 相手との接触によりお手つきをさせられた場合は、双方共にお手つきをしたものとする。

【補足】 ○相手との接触によって物理的に手の軌道が変わったことによりお手つきをさせられた場合をいう。

○お手つきをした手が札から離れてから対戦者の手にぶつかった場合で、対戦者が札に触っていない場合は、共お手つきとならない。

- 二 相手との接触の後でも、自己の動作によってお手つきをした場合は共お手つきとしない。

【補足】 ○相手との接触が原因であっても、反射的に手を動かしたことによってお手つきをした場合は、共お手つきとしない。

- 三 一方の競技者がお手つきをしてまだ札に触れている状態の手に、対戦者の手が触れた場合は、共お手つきとする。ただし、手の軌道からして明らかに札に触れないと判断される場合は、この限りではない。

第八章 送り札

第二十五条（送り札）

- 一 対戦者の陣にある出札を取った場合、もしくは、対戦者がお手つきをした場合、自己の持札1枚を対戦者に送ることができる。

【補足】 ○送り札は、相手陣内へ、相手の方向に向けて送るものとする。

○札を送る際は、あぐら、立て膝、中腰等の姿勢で送ってはならず、座り直して、きちんと対戦者に向かって送ること。

○競技進行上、相手が札の整理を完了するまで札を送るのを待つ必要はない。

- 二 対戦者の陣にある出札を取った場合で、かつ、対戦者のお手つきがあった場合は、2枚送ることができる。

【補足】 ○札を2枚送るときには、重ねずに1枚ずつ送るものとする。

- 三 出札が双方いずれの陣にもない時に、対戦者が両方の陣の札にお手つきをした場合は、2枚送ることができる。

- 四 共お手つきをした場合や、相手陣の出札を取って自陣の札にお手つきをした場合など、双方が札を送ることができる場合は、お互いの送り札を差し引いた枚数のみ送ることができる。

- 五 下の句の読みが始まる迄に送らなかった場合、送り札の権利は喪失する。

【補足】 ○読手が下の句を読み始めた場合でも、送る意志が有って手を挙げて読みを制止していたにもかかわらず、読手が気付かずに読み始めてしまった場合は、この限りではない。

- 六 錯誤により、送る権利が無いのに送り札をしてしまった場合でも、双方が気付かないまま下の句の読みが始まった場合は、その送り札は有効となる。

第二十六条（送り札の選定）

- 一 送り札の選定は送る側の任意とする。但し、送り札から手を離れた瞬間から送り札の変更はできない。

- 二 送り札の選定は速やかに行うこととし、むやみに長考してはならない。

- 三 錯誤により、1枚送るべきところを2枚送ってしまった場合は、最初に送った札を有効とする。

【補足】 ○2枚を同時に送った場合に限り、どちらの札を送り札にしてもよい。

第九章 その他の事項

第二十七条（禁止行為）

競技者は、以下の行為をしてはならない。

- (1) 読みが下の句の余韻に入ってから、声を発したり畳を叩いたりすること。
- (2) 競技中の飲食または喫煙。
- (3) 競技中に、必要以上に畳を叩くこと。
- (4) 読手の発音のくせや音の不明瞭さ等に対してクレームをつけること。
- (5) きまり字、出札、読札および送り札に関し、対戦者やその他の者に確認すること。
- (6) 対戦者、他の競技者、読手、審判員に対し示威牽制等不適切な言動を行うこと。
- (7) 競技者や観客による、競技者への応援行為。
- (8) 審判員の判定、指示に従わないこと。

【補足】 ○(3) 畳を叩かなくとも、度を越した頻繁な素振りを行わないこと。

○(5) 原則的に競技者は、競技中、競技に関することは勿論、その他のことについても、他の競技者、或いは観戦者と話をしてはならない。読みが途中で止まった場合や、雑音等により聞こえなかった場合は、その札に関する限り、審判員に確認を求めることができるが、それ以外の札については確認できない。

○(7) 団体戦等である程度の応援が認められている場合を除き、原則として応援とみなされる行為をしてはいけない。

○禁止行為を行った場合、審判員の判断により、注意、警告、退場の処分の対象となる。

○注意とは、違反事項を指摘し、その改善を促すこと。警告とは、再度違反があった際には退場処分にすることを前提に宣告されるもの。退場とは、競技を途中で止めさせ反則負けとし競技場からの退場を命じること。

○審判員は、観戦者に対しても同様の措置をとることができる。

第二十八条（附則）

- 一 本規程に定めのない事項については、審判長の判断による。
- 二 本規程の更新については、一般社団法人全日本かるた協会は必要に応じてこれを行うことができる。

平成20年9月施行

※一般社団法人への移行に伴う名称変更を行っています。

※漢数字を必要に応じてアラビア数字に変更しています。

※補足の位置を一部移動させています。

※平成31年4月までの通達事項を追記しています。

※最終更新日：令和元年5月1日